

* Program *

A.Borodin:Symphonic Poem "In the Steppes of Central Asia"

交響詩「中央アジアの草原にて」
(A. ボロディン)

P.Tchaikovsky:Nutcracker, suite from the ballet
バレエ組曲「くるみ割り人形」作品71a
(P. チェイコフスキー)

第1曲 小序曲 Ouverture miniature

第2曲 行進曲 Marche

第3曲 金平糖の精の踊り Danse de la Fée Dragée

第4曲 ロシアの踊り(トレパック) Danse russe (Trepak)

第5曲 アラビアの踊り Danse arabe

第6曲 中国の踊り Danse chinoise

第7曲 芽笛の踊り Danse des mirlitons

第8曲 花のワルツ Valse des fleurs

intermission
(15分)

A.Dvorák:Symphony No.9 in E Minor "From the New World" Op.95

交響曲第9番 ホ短調 作品95「新世界より」
(A. ドヴォルザーク)

第1楽章 アダージョ — アレグロ・モルト Adagio - Allegro molto

第2楽章 ラルゴ Largo

第3楽章 スケルツォ;モルト・ヴィヴィアーチュ Scherzo : Molto vivace

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ Allegro con fuoco

Program note

交響詩「中央アジアの草原にて」

アレクサンドル・ボロディンは、1833年にサントベテルブルクに生まれた作曲家で、交響詩「中央アジアの草原にて」は、「ダッタン人の踊り」と並び、ボロディンの作品の中でもボリューム的な名曲です。

1880年、ロシア皇帝アレクサンル2世の即位25周年記念行事の一つとして行われた入浴画の上演に際し、その伴奏音楽として作曲されました。広大なそして中央アフリカの草原を描する樂曲の雰囲気が窺われるので、どこかで素なロシヨンの佐藤とオリエンタルな東方の旋律が、各ソロ楽器によって流れられます。

バレエ組曲「くるみ割り人形」

作品71a

これまでのバレエ音楽は「踊らための進え物」という感が強く、單調なモロイとおからりやイリスムを駆ることによってダンサーの動きを助けるというものでしたが、チャイコフスキーやガルニエが手がけることによりそれは挑戦的な進化を遂げ、ダンスと対等に渡り合い、お互いに競争を協調・合意しながら成長して、更には音楽だけを取り上げて手に構えできるものに仕上がったのです。「くるみ割り人形」でもそれは遺憾なく發揮されており、各楽器の使い方や非常に巧みだったチャイコフスキーやの作り出す華麗で色彩豊か、繊細かつ大胆な舞き

はお見事しかし言ひようがありません。この曲が今でも作曲家の学生の教材として使われているといふのもうなぎです。

さて、この「くるみ割り人形」は、少女に助けられるくるみ割り人形の王子様に愛され、そのおじいとお父さんお菓子の王様に招待して秋迎の宴が開催広がられる——という單純な物語なのですが、アリヤとかヨーロッパでは、クリスマスシーズンになると各地の劇場で上演されようがす。日本でもうと、年に近づくとここぞばかりにペトーヴェンの「第九」が日本全国で演奏されるのと同じ現象なのでしょうか。

バレエ組曲「くるみ割り人形」は、チャイコフスキーやが自分の作品を指揮する演奏会を行おうとしていた頃、手元新曲などを詠す時間もなかったので、作曲中の「くるみ割り人形」から芭蕾公演を間に差し入れる形で組曲に組まれたのです。組曲の初演は1869年3月19日でしたから、バレエが初めされたのは同年の12月になつてからでした。組曲の時は当时大好評だったのですが、バレエの潮流については、演出やダンサーなどと同時にありと諂ひどいと云うです。世界中で愛され続いているこんな名曲が評だたんなくて、今からでは想像もできないことです。

バレエ全体のかわらしさを予感させる、軽快でチャイニーズな「小序曲(第1部)」で物語りが始まります。クリスマスの夜、ドイツのとある市街会議の家の広間に黒い服をかなわせるバーレイが現れ、子たちが歌を唱へ(第2曲)に合わせて遊びまわっています。そこへお菓子さんがやって来て、少女クララにくるみ割

り人形をプレゼントするのですが、兄のワルツと取る合いになり、その勢いで人形は壊れてしましました。バーレイも終わり客席へ帰ってみんなが寂寥(さみこま)な空、人形のことを心配になつたクララは王宮へと自らに行きました。時計が夜中の12時を打つとクララの体は人形のように小さくなりクリスマスツリーが大きくなり、そこへばらぬの軍団がやつて来て、くるみ割り人形が一人の人の形の軍隊の上の戦いが始まりました。みんなの王様との一戦打ちしなつたくるみ割り人形があわや負けてしまうという時、クララはすみの王室にスリップを投げ掛けたとすみの軍団が退散するのでした。するとくるみ割り人形は一瞬にして美しい王子様となり、助けてくれたおじいにクララを歌うお菓子の四回と招待します。王(金の精)が選んでるお菓子の国では他の國よりも彼女が最も愛されます。コーピーの歌を唄う宿命的なアラビアの踊り(第5曲)お菓子が精で快活でコミカルな「中国の踊り」(第6曲)、飛んだら宇宙気概やかるに見る「ロシアの踊り」(第7曲)、3本のフルートで軽快で爽やかに表現される薔薇園の踊り(第7曲)、あゆる花が舞い、いつもちゃんとお菓子も一緒にして踊りわらる「花のワルツ」(第8曲)、時而発せられるばかりのチェレスタを耳に取り入る「金の精の踊り」(第3曲)等々楽しい宴が続きます。ふと気付くと、朝のクララはクリスマスツリーの下で目を覚ますのでした……。

(G)

交響曲第9番 ホ短調 作品95 「新世界より」

アントニンド・ヴォルフザーク(チコ1841～1904)は、1892年、ユニークによるアシャノル音楽院の院長として招かれ、1895年4月までその職に就きました。交響曲第9番が創始新世界からは、「法芸曲奏曲第12番(アメリカ)」やチコの協奏曲と並んで、彼のアメリカ時代を代表する作品とされています。他の他の作品と比べても際立って親しみやすさにあふれたこの作品は、オーケストラの中心に最も頻繁に演奏される曲のひとつです。もともと優しく、譜面ではかわらん人柄があつたのがヴォルフザークは、アメリカにおいても人々から尊敬されています。しかし、人情に充満した色の美しい歌謡がボヘミアに比し、彼にこよでニューヨークは無味無趣な社会でした。寂しいホームシックしかかかったドヴォルザークは、アメリカーナの民族音楽と祖国がベーマの民謡とが似ていることから、それらを素材にして、ひとつつの交響曲を書き上げます。当時「新世界」と呼ばれていたアメリカ大陸にこんなで「新世界から」と題して発表されたこの交響曲は、ドヴォルザークの歌謡を歌詞化して書き足したボヘミアの手紙の人話をもとに、もはや民族の伝説はそのままの形で使っているが、芸術的に高めるることにより、曲中に反映させています。第2章冒頭のメドレーを歌を歌詞化することは古くから行われておき、キヤンソンフィヤーなどのレリエーションソングが没落した日には落ちて「あるいは『家路』などの曲名で耳にされたことのある方も多いのではないかでしょうか。

★ バレエ組曲「くるみ割り人形」作品71a
P.Tchaikovsky: Nutcracker, suite from the ballet

交響曲第9番 ホ短調 作品95
新世界より

A.Dvořák: Symphony No.9 in E Minor "From the New World" Op.95

交響詩「中央アジアの草原にて」
A.Borodin: Symphonic Poem "In the Steppes of Central Asia"

第54回定期演奏会
千代田フィルハーモニー管弦楽団
[指揮] 濱本 広洋
2011年11月27日(日) 14:00開演 (13:30開場)
ティアラこうとう大ホール
1,000円(全席自由)

11/27
2011 SUNDAY